

韓国語学習における学習者意識の実態調査

——愛知大学の事例分析——

朴 瑞 庚

초록

본 연구는 일본 대학의 제2외국어로서의 한국어 학습자를 대상으로, 한국 및 한국인에 대한 관심과 이미지, 그리고 학습 과정에서의 경험과 인식을 조사하였다. 한국어 학습에 대한 태도 형성의 단서를 파악하기 위해 학습자가 지니는 한국 및 한국인에 대한 관심과 이미지를 분석한 결과, 한류가 학습자의 의식 형성에 크게 영향을 미치고 있음을 확인하였다. 한국 및 한국인에 대한 이미지는 전반적으로 긍정적 인식이 우세하였으나, 미디어를 통해 형성된 이미지가 고정관념으로 이어질 가능성 또한 시사되었다. 학습 양상을 분석한 결과, 한국어 수강 동기로는 대중문화 향유가 가장 높은 비율을 차지하였으며, 학습 목표는 전문적 수준보다는 일상적 의사소통 능력 습득에 중점을 두는 경향을 보였다. 수업에서는 구두 의사소통 능력 향상에 대한 선호가 두드러졌고, 향후 여행 등 생활과 밀접한 상황에서의 한국어 사용에 대한 기대가 높게 나타났다. 학습상의 어려움으로는 음성적 요소가 가장 많이 언급되었으며, 수업 개선에 대한 요구 또한 발음 지도와 회화 연습 등 음성적 측면의 강화에 집중되었다. 수업 외 학습에서는 수업 내용의 보완과 더불어 한국의 문화와 사회, 한국인의 사고방식에 대한 이해를 심화하려는 태도를 보였다. 또한 대부분의 학습자가 교과 이수 후에도 학습을 계속하려는 의지를 보여, 한국어가 지속적인 학습 대상으로 인식되고 있음을 확인하였다.

이러한 연구 결과는 한국어 교육에서 학습자의 문화적 관심과 실용적 지향을 반영하고, 음성 언어 교육의 강화와 실천적 학습 활동을 중시하며, 지속적인 학습이 가능하도록 지원하는 교육 환경 조성이 중요함을 시사한다.

주제어: 한국어 교육, 일본 대학 학습자, 제2외국어로서의 한국어, 학습자 인식, 학습 양상

1. はじめに

2000年代初頭以降、日本社会において韓国文化に対する関心が急速に高まった。韓国の大衆文化は、いわゆる「韓流」として広く認知され、時代の流れとともにその様相を変えながら、日本の人々の生活や価値観、さらには言語学習の動機にまで影響を及ぼしている。その過程の一端として、2000年代初頭に放送された韓国ドラマが、これまで韓国文化に馴染みの薄かった中高年層を中心に支持を集めたことが挙げられる。テレビという大衆的なメディアを通して韓国文化に触れたことが、日本社会における韓国文化への関心を喚起する契機となった。その後、2010年代前半には、K-pop を中心とする音楽コンテンツが若年層の間で広がりを見せた。この時期は、YouTube や SNS といったデジタルプラットフォームの普及が進み、情報発信と受容の構造が変化したことで、韓国文化はより能動的かつ参加型の形で拡散されるようになった。さらに、2010年代後半以降になると、韓流の広がりにはドラマや音楽にとどまらず、食文化、美容、ファッションなど日常生活のあらゆる領域へと拡張し、韓国文化は自然に取り込まれる身近な文化要素として受容されるようになった。このように、2000年代初頭から現在に至るまでの約20年間で、韓流は世代や媒体を横断しながら変化と拡張を続け、日本社会に確かな影響を与えてきたと言える。

韓国文化への関心の高まりは、日本の大学における韓国語教育の現場にも直接的な影響を及ぼしている。外形的な側面から見ると、2022年の時点で日本の807の大学のうち468校で韓国語の授業が行われている。2002年には687の大学のうち322校であったことを踏まえると、この20年間で韓国語教育が着実に拡大してきたことが分かる¹⁾。こうした変化は、フランス語やドイツ語といった伝統的外国語の開講校が減少している状況²⁾の中で顕著に見られるものであり、韓国語が日本の大学における外国語教育の主要な一角を担うまでに成長したことを示唆している。

日本の大学における韓国語教育は外形的には大きく成長してきたものの、教員の質向上や教育内容の充実、教育現場の改善など、質的側面の課題が依然として求められている。오문경 他 (2020) は、教育の質を向上させるためには教員の専門性の確保が不可欠であり、韓国語教員資格制度や養成課程の整備、継続的な研修体制の構築が求められると述べている。위햇님・오지혜 (2025) は、大学での教養科目としての韓国語授業に関して、高校における学習成果を大学教育へと効果的につなぐ体制の構築が必要であり、より高度な教育内容への質的転換の必要性を指摘している。김현철 (2015) は、授業時間の制約や学習動機の低下など教育現場における課題を明らかにし、教室内の活動だけでは限界があることを指摘した上で、教室外の活動と連携する教育システムの構築を提案している。

一方、学習者の視点から現状を把握し、韓国語教育の質的向上を図ろうとする取り組みも

進められている。강현화 (2022) が指摘しているように、韓国語教育には地域の実情に即した現地化が求められており、そのためには現地の教育環境や学習者の特性を踏まえた実態把握が不可欠である。本研究の対象となっている日本の大学において韓国語を専攻としない学習者に焦点を当ててみると、学習者のニーズや意識を明らかにしようとする調査研究が多方面で展開されている。例えば, 박종후 (2014) は日本の大学における非専攻韓国語学習者を対象に、その受講動機や関心分野、学習経験の有無などを全国レベルの大規模調査を行い、学習者が外的な要因よりも、文化的関心などの内的動機によって韓国語を学んでいる傾向を明らかにした。さらに, 박종후・정선영 (2019) は通時的調査を行い、外的動機の減少と内的動機の強化という変化を示し、韓国語教育の目的再考を促す資料を提供している。個別大学レベルでの実践的調査も行われており, 박진희 (2016, 2017) は大学の韓国語学習者を対象に学習動機や授業満足度を分析し、教育支援体制の不十分さや授業内容の改善の必要性を指摘している。文嬉眞・金美淑 (2014, 2015) は、大学教養課程の履修者を対象に意識調査を実施し、文化理解や交流志向が強い一方で、実践的な言語運用力の育成が課題として残されていることを明らかにした。また, 박瑞庚 (2022) は授業内外の学習実態を分析し、教室外での自律的学習を促進する教育設計の必要性を提起している。これらの研究は、日本の大学における第二外国語としての韓国語教育の現状を多角的に捉えるものであり、教育の質的改善に向けた基礎的資料として重要な意義を持つ。しかしながら、学習者のニーズや意識は時代的背景や社会的要因の変化に影響を受けて変容するものであり、継続的かつ体系的なデータの蓄積と分析が求められている。そこで本研究では、これまでの研究で蓄積された知見を踏まえつつ、日本の大学で第二外国語としての韓国語を学んでいる学習者の韓国語学習に対する意識を明らかにし、学習者に提供すべき学習環境の在り方について考察を試みる。

2. 調査の概要

2.1. 調査対象

愛知大学に開設されている第二外国語科目「韓国・朝鮮語」は、学習期間1年の正規課程において必修科目として開講されている³⁾。本研究の調査対象は、2020年度に当該科目を履修していた156名（男性75名・女性81名）の学習者である。平均年齢は19.0歳（標準偏差：0.6）であり、母語は全員日本語である。これら学習者の中で、大学入学以前に韓国語学習歴がある者は7名⁴⁾で、いずれも独学によるものであった。韓国への滞在経験については、7名が3日から7日の短期滞在を経験したと回答している。

なお、当時は新型コロナウイルス感染症の影響により登校が制限されていたため、調査対象者は2020年4月の学期開始から調査実施時点まで、オンライン形式の授業を受講していた。

2.2. 調査項目

本研究では、韓国語学習者の学習実態とその背景にある意識を多角的に検討することを目的として、アンケート調査を実施した。調査においては、学習者全体の傾向を定量的に把握するとともに、個々の意見の多様性を質的に反映させるため、選択式と自由記述式を併用して設問を構成した。設問は、朴瑞庚・林河運（2017）で用いられた項目を基に修正および加筆して作成した。具体的な設問内容は以下のとおりである。まず、(1)と(2)は言語学習そのものとは直接関係しないが、学習者が韓国・韓国人に対して抱く関心やイメージを把握し、韓国語学習に対する態度形成を理解する手がかりとなる設問である。次に、(3)から(10)は、学習動機や学習目標、困難点などを通して、学習者の韓国語学習に関する実態を把握するための設問である。

- (1) 韓国・韓国人に対して関心があるか。ある場合はどのような点に関心があるか。
- (2) 韓国・韓国人に対してどのようなイメージを持っているか。
- (3) 第二外国語として韓国語を選択した理由は何か。
- (4) どのような韓国語能力を身につけたいか。
- (5) 学習した韓国語を今後どのように役立てたいか。
- (6) 韓国語学習で難しい点、苦手と感じる点は何か。
- (7) 授業で4技能のうちどの技能に重点を置いて学習したいか。
- (8) 授業で不足している点、改善を求める点は何か。
- (9) 授業と予習・復習以外に、韓国・韓国語について学ぶ機会があれば、どのような内容を学習したいか。
- (10) 単位取得後も機会があれば韓国語学習を継続したいか。

2.3. 調査手順と分析

本調査は、2020年度「韓国・朝鮮語」授業の春学期終了時期にあたる7月末から8月初めにかけて実施した。調査は学習支援システム Moodle のアンケート機能を用いてオンライン形式で行った。学習者は Moodle 上のアンケートに各自アクセスし、質問に応じて選択肢を選択するか、自由記述欄に回答を入力した。

得られたデータについては、選択式回答では各選択肢の回答率を算出し、自由記述回答については記述内容からキーワードを抽出して範疇化を行い、質的分析を試みた。

3. 結果および考察

3.1. 韓国・韓国人に対する関心とイメージ

表1は、「韓国・韓国人に対して関心があるか、ある場合はどのような点に関心があるか」という設問に対する回答結果である。学習者156名のうち、「関心がある」と回答した者は113名(72.4%)で、多くの学習者が韓国や韓国人に対して積極的な関心を抱いていることが示された。一方、「どちらとも言えない」が40名(25.6%)、「関心がない」が3名(1.9%)であり、関心度には一定の幅が見られた。

具体的な関心ごととしては、「音楽・ドラマ・映画など大衆文化」(56.4%)への関心が最も多く、いわゆる韓流の影響が強く反映されていた。この傾向は、日本における韓流ブームが韓国語学習の需要を高めたと考察した先行研究(박종희 2014; 文嬉眞・金美淑 2014; 朴珍希 2016; 강현화 2022)の知見とも一致するものである。また、「食べ物・食事作法など食文化」(49.4%)、「美容・ファッション」(36.5%)への関心も高く、これらは日常生活に密着した文化要素であることから、学習者が韓国をより身近に感じ、親近感を持つ契機となっていると考えられる。さらに、「韓国人の価値観・態度」(14.7%)、「韓国語・ハングル」(11.5%)など、表層的な文化要素にとどまらず、韓国人の思考様式や言語そのものへの関心も一定数確認された。加えて、「観光地・街の風景」(7.7%)や「生活様式・習慣」(3.8%)、「日本と韓国の歴史」(3.8%)などにも少数でありながら関心が見られ、関心の対象が多様に広がっていることが示された。なお、表1の各項目に対する具体的な学習者の回答例⁵⁾を以下に示す。

- ・ K-POP で歌とダンスが上手なところ。韓流ドラマで話の展開が面白いところ。
- ・ 韓国料理に興味があります。私はあまり辛いものは得意ではないのですが、以前韓国料理のお店で食べたものが辛すぎずおいしかったからです。
- ・ 韓国の人は美容に対する意識がとても高く、日本でも韓国コスメは安くて品質も良いのですごく人気で私も気になっています。
- ・ 韓国のドラマや映画をたまに見ます。その時の、家族の様子だったり人柄に興味があります。
- ・ ハングルが平仮名・カタカナとは全く違う形でどうやって発音するのか気になった。
- ・ お隣の国とはいえ海をまたいでいるので、日本と文化の面でどのような違いがあるのかということに関心を持った。
- ・ どんな観光地があるのか
- ・ 日本にはない韓国独自の生活様式はどのようなものがあるのか。
- ・ 韓国の歴史

表 1. 韓国・韓国人に対する関心 (n = 156)

区分	n	回答率
関心がある	113	72.4%
具体的な関心ごと（複数回答）		
音楽・ドラマ・映画など大衆文化	88	56.4%
食べ物・食事作法など食文化	77	49.4%
美容・ファッション	57	36.5%
韓国人の価値観・態度	23	14.7%
韓国語・ハングル	18	11.5%
文化全般	18	11.5%
観光地・街の風景	12	7.7%
生活様式・習慣	6	3.8%
日本と韓国の歴史	6	3.8%
その他 ⁶⁾	8	5.1%
どちらとも言えない	40	25.6%
関心がない	3	1.9%

表 2 は、「韓国・韓国人に対してどのようなイメージを持っているか」という設問に関する回答を、抽出したキーワードごとに範疇化して示したものである。回答が多く寄せられたのは外見的特徴（51.9%）と食文化（50.0%）に関する記述であった。外見的特徴については「美男美女」「スタイルの良さ」といった容姿を描写する記述が顕著であり、食文化については「辛い」「おいしい」といった抽象語に加え、「サムギョプサル」「キムチ」など具体語を交えた言及が多く見られた点が特徴的であった。これらは、メディアへの露出や飲食体験といった日常的接触に基づく感覚的印象が強く作用していると推測され、そのような感覚的な親近性が韓国像の形成に寄与していると考えられる。

次に多く挙げられたのは内面的特徴（32.1%）に関する記述であり、男性に対しては「優しい」、女性に対しては「気が強い」といった印象に差異があったものの、全体としては「愛情深い」「勤勉」「明るい」「親しみやすい」といった肯定的な記述が多く見られた。一方、日韓関係に関する認識（22.4%）では、否定的評価が他の項目より多く、この項目に対する全体回答の半数を占めていた⁷⁾。特に、友好関係や文化交流への好意的評価がある半面、歴史問題や政治的対立に対する否定的評価が多く見られ、文化的好意と政治的評価が並存する二層的構造が形成されていることが確認された。これらは直接的な対人経験に基づくというよりも、メディアなどを通じた間接的情報に依存した推論的理解である可能性が高い。メディアは韓国人の内面や他国に対する認識を理解する窓口として機能するが、同時に固定的なステレオタイプを強化する要因ともなり得るため、その影響を慎重に捉える必要がある。

他に、大衆文化（21.2%）、美容・ファッション志向（18.6%）、社会（15.4%）などに関する多様な記述も見られ、学習者の韓国・韓国人に対するイメージが多岐にわたっていることが明らかとなった。

表2. 韓国・韓国人に対するイメージ（ $n = 156$, 複数回答）

区分	n	回答率
美男美女が多い、スタイルが良い	81	51.9%
食べ物がおいしい、辛い食べ物が多い	78	50.0%
愛情深い、勤勉、優しい、気が強い	50	32.1%
年配層は反日感情が強い、若者は日本に友好的である	35	22.4%
K-pop が人気、ドラマが面白い、歌とダンスが上手である	33	21.2%
美意識が高い、整形に対する偏見が少ない	29	18.6%
競争社会、教育熱心、政治への関心が強い	24	15.4%
感情表現が豊かである	16	10.3%
年上を敬う、上下関係が厳しい	15	9.6%
日本から地理的に近い	10	6.4%
経済が発展している、物価が安い	9	5.8%
景色や町並みがきれい、都市部は栄えていて賑やかである	9	5.8%
スポーツが得意である	8	5.1%
流行に敏感である	8	5.1%
韓国固有の文化がある	7	4.5%
旅行先としての魅力がある	7	4.5%
話し方に特徴がある。	5	3.2%
その他 ⁸⁾	9	5.8%

なお、表2の各項目に対する具体的な学習者の回答例を以下に示す。

- ・お顔が整っていてスタイルが良い人がとても多い。
- ・辛い物が得意、食べ物が美味しい
- ・何事にも一生懸命努力していて、努力を惜しまない。
- ・韓国の若い子たちは日本に関心を持ってくれていることが多いが、年齢が高い世代に近づくにつれて日本のことを嫌いな人が多いイメージ
- ・映画や音楽などの大衆文化が発展しているイメージ。
- ・美容やファッションなどへのこだわりが強い。
- ・受験勉強で日本よりもすごく熱心に取り組んでいる。
- ・会話中の感情の起伏が激しい。

- ・親を大切にしている。
- ・日本から近い。
- ・IT 産業が強い
- ・お洒落なカフェやお店が多い。
- ・スポーツが非常に強くて、いつも日本と熱い戦いを繰り広げているイメージ。
- ・流行の最先端
- ・非常に文化が豊かな国であると思う。
- ・日本人がよく海外旅行に行っている国のイメージ
- ・早口の人が多い

3.2. 韓国語学習に対する学習者の意識

3.1 では、学習者が韓国・韓国人に対して抱く関心やイメージを分析し、その傾向を概観した。これらは言語学習そのものと直接結び付くものではないが、学習者の学習動機などを理解する上で重要な示唆を含んでいる。一方、言語学習は一定の期間を通じて学習者が段階的に経験を積み重ねていく過程であり、その過程で学習者がどのような経験をしているかを把握することは、韓国語学習の全体像を捉える上で不可欠である。3.2 では学習過程における経験を多角的に検討し、学習者の韓国語学習に対する意識の実態を明らかにする。

表 3 は、「第二外国語として韓国語を選択した理由は何か」という設問に対する回答結果である。まず、「音楽・ドラマ・映画など大衆文化を楽しみたい」(49.4%) が最頻項目であり、3.1 で述べたように韓国の大衆文化への強い関心が、韓国語学習開始の主要な契機となっていることが明らかとなった。これは、学習者にとって身近で親しみやすいコンテンツが言語学習の動機形成に大きく寄与していることを示唆しており、言語学習においてその言語が使用される文化的文脈やイメージ形成の重要性を裏付けている。次に、「旅行など将来に活かしたい」(34.0%)、「日本語と類似している」(18.6%)、「学びやすい」(7.7%) といった回答が一定数見られた。この中で「旅行など将来に活かしたい」の理由が 3 割を超えていることは、韓国語が実用的価値を持つと認識されていることを示している。大学での韓国語学習を終えた後も学習を継続する動機づけにつながる可能性があるため、大学の授業において、学習者の継続意欲を損なわないよう配慮した指導設計が求められる。他方で、「日本語と類似している」や「学びやすい」といった理由は、学習負荷を相対的に低く見積もった上での動機づけである可能性が高く、学習の進展に伴う動機の変容を検討する必要がある。さらに、「周囲の人からのすすめ」(8.3%) や「韓国が好きだ」(7.7%)、「韓国・韓国語・ハンゲルに興味がある」(5.8%)、「韓国・韓国語に親近感がある」(5.8%) などの回答も見られ、韓国語選択の背景には社会的影響や情意的要因など、複合的な要素が作用していることがう

かがえる。なお、表3の各項目に対する具体的な学習者の回答例を以下に紹介する。

- ・ K-POP や韓国ドラマが好きなので何を話しているのかわかるようになりたかったからです。
- ・ いつか韓国へ旅行に行ってみたくて、大学で学んで少しでも話せるようになろうと思ったから。
- ・ 日本語と文法が似ていると思ったので。
- ・ 他の外国語と迷っていたが、先輩がおすすめしてくれたから。
- ・ 一番大きな理由は私が韓国が好きだからです。
- ・ 韓国語は他の外国語と比べて発音が日本語と似ていて簡単だと言われている。
- ・ 韓国語を選んだ一番大きな理由は、韓国にとっても興味があったからです。
- ・ 多くの言語がある中で、親近感がわくのが韓国語だったから。

表3. 韓国語の選択理由 (n = 156, 複数回答)

区分	n	回答率
音楽・ドラマ・映画など大衆文化を楽しみたい	77	49.4%
旅行など将来に活かしたい	53	34.0%
日本語と類似している	29	18.6%
周囲の人からのすすめ	13	8.3%
韓国が好きだ	12	7.7%
学びやすい	12	7.7%
韓国・韓国語・ハングルに興味がある	9	5.8%
韓国・韓国語に親近感がある	9	5.8%
その他 ⁹⁾	6	3.8%

表4は「どのような韓国語能力を身につけたいか」を尋ね、その回答を集計した結果である。学習者には、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）における級別の認定基準¹⁰⁾を提示し、自らが目標とする学習到達レベルとして最もふさわしいものを一つ選択させた。その結果、最も多かったのはA2レベル（32.1%）であり、B1（28.2%）およびA1（25.6%）と合わせて、全体の約9割がA1・A2・B1に集中していた。この傾向は、多くの学習者が日常的かつ身近な話題を中心とする基礎的なコミュニケーション能力を現実的な到達目標として設定していることを示している。A1からB1にかけて回答が集中していることは、学習者が実際に使える韓国語を志向していることの表れであり、上記の表3で確認された「旅行など将来に活かしたい」といった実用性を重視する学習動機とも整合的である。学習動機の維持という観点からすれば、大学における韓国語教育では、基礎的なコミュニケーション能力の育成を

重視するとともに、自己効力感が得られる実践的活動を適切に取り入れることが必要であると考えられる。

表4. 韓国語の学習到達目標 ($n = 156$)

	区分	<i>n</i>	回答率
A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。	40	25.6%
A2	ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。	50	32.1%
B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。	44	28.2%
B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。	10	6.4%
C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができる、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。	2	1.3%
C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。	10	6.4%

表5は、「学習した韓国語を今後どのように役立てたいか」という設問に対する回答結果である。最も高い割合を示したのは「旅行で使う」(73.7%)であり、学習者の大多数が韓国語を旅行先でのコミュニケーションに活用することを想定していることが確認された。次いで「音楽・ドラマ・映画など大衆文化を楽しむ」(35.3%)や「韓国人と交流する」

(18.6%) が挙げられ、学習者が韓国語を K-pop や韓国ドラマといった大衆文化コンテンツの理解や、異文化の人々との交流に活かそうとしていることが示された。一方、「職業に活かす」(6.4%)、「韓国語の看板や商品表示を読む」(5.8%)、「教養として異文化理解に役立てる」(3.8%) といった回答も見られたが、その割合は相対的に低かった。これらの結果は、韓国語が学習者にとって主としてキャリア形成や高度な知的活動のためではなく、身近な文化的経験や余暇活動と強く関連付けられていることを示している。なお、表 5 の各項目に対する具体的な学習者の回答例を以下に紹介する。

- ・韓国旅行に行きたいと思っているので、その時に役立てれば良いと思っています。
- ・韓国の音楽を聞いたりドラマを見る時に役立てたいです。
- ・日本にいる韓国人留学生と韓国語で喋ってみたい。
- ・私は将来、韓国語を使う仕事をしたいと考えているので、そのことに役立てたらいいなと思います。
- ・韓国の商品や外で見かけた韓国語で書かれている看板などを読んでみたいです。
- ・国際教養を身に付ける一環になると思います。

表 5. 韓国語の将来への活用 (n = 156, 複数回答)

区分	n	回答率
旅行で使う	115	73.7%
音楽・ドラマ・映画など大衆文化を楽しむ	55	35.3%
韓国人と交流する	29	18.6%
職業に活かす	10	6.4%
韓国語の看板や商品表示を読む	9	5.8%
教養として異文化理解に役立てる	6	3.8%
その他 ¹¹⁾	10	6.4%

表 6 は、「韓国語学習で難しい点、苦手と感じる点は何か」を問う設問に対する回答結果である。最も多かったのは「発音」(82.7%) であり、濃音や激音といった個別音の習得に関する具体的な困難が多く挙げられた。学習者は個別音の発音に加え、「発音規則」(5.8%) についても困難を感じており、これらは学習初期から直接的に体感される困難であるため、学習者にとって自覚しやすいと考えられる。次いで多かったのは「聞き取り」(35.9%) であり、個別音の聞き分け、連音化した音声の聞き取り、さらには内容理解の難しさなど、複合的な困難が見られた。「単語や表現の暗記」(30.8%) も一定の割合を占め、語彙や表現を会話の場面などで素早く想起できないことが学習上の課題として浮かび上がっていた。さら

に、学習者は「音読」(21.2%)に困難を抱えており、ハングル表記と実際の発音のずれが学習負担を高めていることが確認された。なお、「文法」(20.5%)や「書く」(14.1%)に関する回答も見られたが、その割合は他の項目と比べて低く、全体として学習者は音声運用面での困難を中心に挙げていた。「文法」に関する結果は、本調査の実施時期と関係していると考えられる。本調査は学習開始から約4か月後に行われており、授業では個別音や音声の連続をどのように処理し産出するかに重点が置かれ、文法は基礎的段階にとどまっていた。そのため、学習者の注意が音声面に向けられやすく、発音や聞き取りに関する困難が顕著に表れたと考えられる。今後、学習が進み文構造の精緻さが求められるようになれば、文法に関する苦手意識が増加する可能性もある。以下に、表6の各項目における学習者の回答例を示す。

- ・発音が難しいです。特に濃音が苦手です。
- ・パッチムが連音化されると、聞き取りづらくなる。
- ・なかなか単語を覚えられないところ
- ・文を読むときに、濃音化や激音化などの発音ルールを瞬時に適用して読むことが難しい。
- ・日本語では「〜は」は一つしかないけれど、韓国語では、パッチムがあるときとないときに2つ使い分けなければいけないこと
- ・ハングルを書くことにあまりなれていないので、時間がかかります。
- ・文字の組み合わせによって発音が変化するパターンがいくつもあり、覚えるので精一杯だった。

表6. 韓国語学習における困難点 ($n = 156$, 複数回答)

区分	n	回答率
発音	129	82.7%
聞き取り	56	35.9%
単語や表現の暗記	48	30.8%
音読	33	21.2%
文法	32	20.5%
書く	22	14.1%
発音規則	9	5.8%
その他 ¹²⁾	11	7.1%

表7は、「授業で4技能のうちどの技能に重点を置いて学習したいか」という設問に対する回答結果を示している。その結果、「話す」(48.7%)と「聞く」(33.3%)の合計が8割を超えており、学習者は韓国語学習において口頭での運用能力を重視していることが明らかと

なった。一方、「読む」(12.8%)や「書く」(5.1%)といったリテラシーに関わる技能は、相対的に重視する割合が低い。「読む」「書く」は単なる読み書きにとどまらず、精緻な文構造の理解を促すなど、結果として口頭コミュニケーションの質を高める役割を果たす。また、論理的思考力を養い、自らの思考を客観化し内省を促すことで、学習の深化に寄与する。そのため、教育現場においては、学習者が「聞く」「話す」を優先する傾向を十分に踏まえつつも、「読む」「書く」の重要性を認識させる指導が求められる。

表7. 技能別の学習希望 ($n = 156$)

区分	n	回答率
聞く	52	33.3%
話す	76	48.7%
読む	20	12.8%
書く	8	5.1%

表8は、「授業で不足している点、改善を求める点は何か」を問う設問に対する回答をまとめたものである。本調査はオンライン授業を受講している学習者を対象としたこともあり、他の設問に比べて、オンライン環境において十分に補えなかった活動への不満など、オンライン授業に直接言及する回答が多く見られた点が特徴的であった。中でも、「発音指導やフィードバックを強化してほしい」(29.5%)が最頻項目であり、発音に関する視覚的・聴覚的手がかりや教員による即時的な訂正がオンライン授業では得にくい状況にあることが背景にあると考えられる。「日常場面で使える表現をもっと学びたい」(16.0%)や「会話練習や発話の機会を増やしてほしい」(12.2%)といった回答も一定数見られ、学習者が知識習得にとどまらず、コミュニケーションを通じて実際に使える韓国語学習を求めていることがうかがえる。一方、「改善を特に求める点はない」(21.8%)という回答もあった。ただし、この回答は必ずしも改善点が見つからなかったのではなく、期待水準が低めに設定されていた可能性もあるため、解釈には留意が必要である。さらに、「語彙や例文をより豊富に学びたい」(8.3%)や「さらに多くの音声を聞く機会がほしい」(8.3%)、「読む活動を充実させてほしい」(5.1%)、「文法練習をもっとしたい」(4.5%)といった要望も見られた。これらは、学習者が韓国語の運用能力の向上に必要な学習素材や練習機会が授業において十分に提供されていないと認識していることを反映している。加えて、「授業の進行速度など運営面を改善してほしい」(4.5%)や「他の受講生との交流の機会がほしい」(3.2%)など、授業運営や学習形態に関わる要望も寄せられた。これらは、オンラインという学習環境に特有の制約や不足を補いたいという学習者のニーズを示していると考えられる。以下は、各項目における学習者の回答例である。

- ・今回はオンライン授業だったことで、発音の際、自分の口の形が正しく出来ているのか判断が難しいこと
- ・はじめて韓国語を学ぶ私でもわかりやすい授業だったので、特に改善してほしい点はありません。
- ・日常的な会話で使えるフレーズをより多く教えてほしい。
- ・オンライン授業だからだとは思いますが、誰かとペアになって会話練習をしたりしてみたかったです。
- ・もっといろいろな単語
- ・機械越しではなく実際に韓国語の発音を聞きたい
- ・文字をすらすらと読めるようになること
- ・もっと文法を練習したい。
- ・対面じゃない分、自分の理解度が追いつかないせいか、授業のスピードが早く感じてしまうこと
- ・もっと練習問題があってもいいかなと思いました。
- ・韓国語を書く機会が少ないかなと思います。
- ・オンライン授業なので、仕方がないことかもしれませんが、もし可能であれば、他の受講生と関わる機会が欲しい。

表 8. 授業における不足点 ($n = 156$, 複数回答)

区分	n	回答率
発音指導やフィードバックを強化してほしい	46	29.5%
改善を特に求める点はない	34	21.8%
日常場面で使える表現をもっと学びたい	25	16.0%
会話練習や発話の機会を増やしてほしい	19	12.2%
語彙や例文をより豊富に学びたい	13	8.3%
さらに多くの音声を聞く機会がほしい	13	8.3%
読む活動を充実させてほしい	8	5.1%
文法練習をもっとしたい	7	4.5%
授業の進行速度など運営面を改善してほしい	7	4.5%
練習問題を増やしてほしい	6	3.8%
書く活動の機会を増やしてほしい	5	3.2%
他の受講生との交流の機会がほしい	5	3.2%
その他 ¹³⁾	14	9.0%

表 9 は、「授業と予習・復習以外に、韓国・韓国語について学ぶ機会があれば、どのよう

な内容を学習したいか」の設問に対する回答結果である。分析の結果、大きく二つの特徴が確認された。まず、授業内で十分に満たされなかった要素を補う学習ニーズである。「韓国の今を映す言葉」(33.3%)、「韓国人との会話」(17.9%)、「授業内容より高度な韓国語」(17.3%)といった回答は、いずれも学習者が生きた表現や実際の会話、さらには授業で扱う水準を超えた韓国語に触れたいという強い欲求を反映している。これらは、学習者が授業を通じて自らの表現力の不足を実感し、その不足を授業外で補おうとする姿勢の表れと解釈できる。次に、韓国文化や社会に関する知識を学び、さらにその社会の構成員が持つ意識を理解しようとする志向である。「音楽・ドラマ・映画など大衆文化」(34.0%)、「韓国文化全般」(23.1%)、「日本と韓国の歴史」(13.5%)、「日常生活に関する知識」(12.8%)、「食べ物や食事作法など食文化」(9.0%)の他、「韓国人の価値観・態度」(7.7%)も一定数確認された。これらの回答は対象領域が多様であるものの、いずれも韓国語を単なる言語習得にとどめず、社会文化的文脈や人々の意識と結び付けて把握し、その過程を通して異文化理解を深めようとする姿勢を示していると考えられる。加えて、「旅行に関する知識」(5.1%)のように旅行に言及する内容は本項目に限らず、第二外国語として韓国語を選択した理由(表3)や将来への活用(表5)においても繰り返し言及されており、学習者にとって持続的に表出する関心の一つとなっていることが分かる。なお、表9の各項目に対する具体的な学習者の回答例を以下に紹介する。

- ・音楽が好きなので韓国語の歌を使って勉強したいです。
- ・韓国語にも日本のように流行語や、造語、略語などがあるのかを学んでみたい。
- ・韓国の文化について学びたい。
- ・ネイティブの韓国人と直接話す。
- ・今回よりもレベルアップした韓国語
- ・日本との関係が気になるので歴史をもっと深く学んでみたい
- ・韓国ではいけないこと
- ・韓国と日本の食文化の比較
- ・韓国人がどんな人か(性格など)
- ・韓国に行ったら必ず訪れるべき観光スポット

表9. 授業外で学習したい内容 (n = 156, 複数回答)

区分	n	回答率
音楽・ドラマ・映画など大衆文化	53	34.0%
韓国の今を映す言葉	52	33.3%
韓国文化全般	36	23.1%
韓国人との会話	28	17.9%
授業内容より高度な韓国語	27	17.3%
日本と韓国の歴史	21	13.5%
日常生活に関する知識	20	12.8%
食べ物や食事作法など食文化	14	9.0%
韓国人の価値観・態度	12	7.7%
旅行に関する知識	8	5.1%
その他 ¹⁴⁾	10	6.4%

表10は、「単位取得後も機会があれば韓国語学習を継続したいか」という設問に対する回答結果である。「はい」(89.1%)が圧倒的多数を占めており、大多数の学習者が韓国語を単なる履修科目に終わらせるのではなく、継続的な学習対象として捉えていることが分かる。一方、「どちらとも言えない」(9.6%)が一定数あり、ごく少数ながら「いいえ」(1.3%)と明確に否定した学習者もいた。これは、韓国語学習の継続に対しておおむね前向きな傾向が見られる一方で、前述の表6で示されたような学習上の困難や、それに伴う挫折経験が学習者の態度に影響を及ぼした可能性があると考えられる。学習指導においては、学習者の困難を踏まえた学習環境の支援や、それに対応した指導方法の工夫が求められる。

表10. 韓国語学習の継続意向 (n = 156)

区分	n	回答率
はい	139	89.1%
どちらとも言えない	15	9.6%
いいえ	2	1.3%

3.3. 韓国語教育への示唆

本調査の結果は、大学における韓国語授業の改善に多面的な示唆を与える。ここでは、その知見を踏まえ、授業改善の方向性について検討する。まず、学習者が韓国語を選択する主な契機は大衆文化や旅行であり、将来的な活用場面としてもこれらを強く意識していることが明らかになった。しかし、授業内では文字や個別音の習得、基礎的な文法といった入門段階に不可欠な学習が優先されるため、学習者の関心を直接的に授業へ反映させることは難しいの

が事実である。したがって、このギャップを補うためには授業外活動の場を設けることが一つの有効な方策となり得る。実際に、愛知大学では韓国語フリートークや日韓タンデム学習といった取り組みを実施し、学習者が自ら興味ある主題を選び、自由に発話や交流を行える機会を授業外活動として提供している。こうした取り組みは、学習者が自律的に参加し、自らの希望に即した学習を行うことを可能にし、学習動機の維持に寄与することが期待される。

次に、本調査では使える韓国語を求める声が多く見られ、社会文化的知識や実際のコミュニケーションを重視する傾向も確認された。こうした要望に応えるためには、オーセンティック素材を適切に導入することが有効であると考えられる。新聞記事や映像資料、SNSに見られる言語表現などを取り入れることで、現代の言語使用や社会文化的背景を直接提示することが可能となる。ただし、入門段階の学習内容を考慮すれば、オーセンティック素材の活用は容易ではない。とはいえ、素材が持つ難解な語彙や文の構造といった言語知識に焦点を当てるのではなく、偏見の軽減に指導の焦点を置くのであれば、オーセンティック素材は十分な価値を持つ。適切に活用することで、学習者が韓国社会や文化について抱きやすいステレオタイプや固定化されたイメージを相対化し、より深い異文化理解を促進する教育資源となり得ると考えられる。

最後に、本調査はオンライン形式で行われた授業の受講者を対象として実施したこともあり、学習者の声の中には、少数ながら情意的側面に関わる問題も見られた¹⁵⁾。自らの発話や理解が正しいのか判断できないことや、十分なフィードバックが得られないことなどによる不安は、学習の持続を妨げる要因となり得る。本調査で浮かび上がったこうした不安は対面授業においても生じ得るが、オンライン授業という形式によって一層強調された可能性がある。これらの結果は、指導において学習者にいかなる環境を提供すべきかを再考する必要性を示している。特に、教師が誤りを恐れず挑戦できる雰囲気を整え、失敗を挫折ではなく次の一歩へとつなげるよう支援することは、教育実践上の重要な課題となる。

4. おわりに

本稿では、日本の大学において第二外国語として韓国語を履修する学習者を対象に、韓国・韓国人に対する関心やイメージを把握するとともに、韓国語の学習過程においてどのような経験をし、それをいかに認識しているのかという実態を明らかにすることを目的として調査を行った。

韓国語学習に対する態度形成を理解する手がかりとして、学習者が抱く韓国・韓国人に対する関心やイメージについて分析を行った。その結果、多くの学習者がK-popやドラマなどの大衆文化に強い関心を示しており、いわゆる韓流が学習者の意識形成に大きな影響を及

ばしていることが明らかになった。韓国・韓国人に対するイメージについては、肯定的なものと否定的なものが併存しており、メディアを通じて形成された印象が先入観の形成につながる可能性があると考えられる。

学習者の韓国語学習に関する実態を調べた結果では、以下のような傾向が見られた。第二外国語として韓国語の選択理由については、「音楽・ドラマ・映画など大衆文化を楽しみたい」という回答が最も多く、学習者の大衆文化への強い関心が韓国語学習開始の主要な契機となっていることが分かった。学習到達目標については、専門性よりも基礎的なコミュニケーション能力の獲得が大多数を占め、日常的な言語使用を志向する姿勢がうかがえた。授業で重点的に学習を希望する技能としては、「聞く」「話す」が圧倒的に多く、口頭での運用能力の習得が強く求められていた。将来の活用場面については、「旅行で使う」が最多であり、韓国語学習がキャリア形成というよりは生活に密着した場面に結び付けられていることが示された。学習上の困難については、発音や聞き取りといった音声面での課題が顕著であり、授業における要望も発音指導など音声面の強化を求める傾向が見られた。授業外で学習を希望する内容としては、授業内で十分に満たされなかった要素を補うものに加え、韓国文化や社会に関する知識を学び、さらにその社会の構成員が持つ意識を理解しようとする姿勢が確認された。単位取得後の学習継続の意向については、約9割の学習者が継続を希望すると回答しており、韓国語を一過的な履修科目ではなく、継続的に取り組む対象として位置付けていることがうかがえた。

上記の結果は、韓国語教育において学習者の文化的関心や実用志向を踏まえつつ、音声指導や実践的活動を重視し、学習継続を支える環境を整備することの重要性を示唆している。本調査で見られた傾向を踏まえると、授業改善のためには既存の授業形態に加えて授業外での学習機会の提供や、オーセンティック素材の活用、さらに情意的側面への配慮などが求められると考えられる。今後は本研究で得られた知見を踏まえ、教育現場において実際に適用可能な指導方法を模索し、具体化していく必要がある。

注

- 1) 文部科学省 (2004, 2024) による。
- 2) フランス語は2002年に687校中543校から2022年には807校中442校へ、ドイツ語は2002年の577校から2022年の424校へと減少している。
- 3) 春学期と秋学期ともに、1コマ90分の授業を週2回、各学期30回ずつ、年間で計60回実施している。
- 4) 学習期間 (Range: 1 か月～2 年) である。
- 5) 学習者の回答例は原文のまま紹介している。

- 6) 「韓国の世界遺産」「e スポーツ」「韓国時代劇に出てくるような歴史的な建物」などがあった。
- 7) 否定的な印象に関する記述が35件中18件もあった。
- 8) 「ゲームが強い」「冬はとても寒い」「民族衣装が美しい」などがあった。
- 9) 「韓国人が話すことを理解するため」「韓国の文化を知る上で、韓国語を理解しておけばより一層楽しめると思ったから」「日本の隣の国なので」などがあった。
- 10) 日本語表記は欧州評議会（2004）による。
- 11) 「妹が韓国のことが大好きなので、少し教えてあげたい」「韓国の文化に触れる際に役立てたい」「役立てようとは思っていない」などがあった。
- 12) 「韓国語を日本語に訳すのが難しい」「文にして話すこと」「自信が持てません」などがあった。
- 13) 「自分がどのくらい理解できていないのかが分からないのがとても不安です」「韓国語を学習する際の効果的な学習法を知りたいと感じた」「もっと韓国の文化について知りたいです」などがあった。
- 14) 「韓国へ留学」「韓国のゲーム事情」「韓国のブランドについて（衣服、企業など）」などがあった。
- 15) 「映像なのでほかの人がどのくらい理解できていて自分がどのくらい理解できていないのかが分からないのがとても不安です」「コロナの影響で仕方がなかったが、対面でなかったので発音が本当に正しいかどうか不安になった」などがあった。

参考文献

- 강현화 (2022) 「세종학당 한국어 보급 정책의 성과와 과제」 『한글』 83(3), 899-927.
- 김현철 (2015) 「일본에서의 한국어교육의 현황과 과제」 『한국초등국어교육』 59, 127-154.
- 박종후 (2014) 「일본 대학에서 비전공 한국어 교육의 현황 조사」 『언어와 문화』 10(3), 119-139.
- 박종후・정선영 (2019) 「일본 대학에서 비전공 한국어 과목 수강자의 수강 동기에 대한 현황과 추이」 『외국어로서의 한국어교육』 55, 119-156.
- 오문경・이경수・문희진 (2020) 「일본 내 한국어교육의 질적 발전 연구－한국어교원 자격 취득을 중심으로－」 『일본근대학연구』 68, 35-54.
- 위헛넴・오지혜 (2025) 「일본 대학에서 한국문학 교육의 현황과 방향－교양 과정을 중심으로－」 『우리말연구』 81, 161-196.
- 欧州評議会 (2004) 『外国語教育Ⅱ—外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』 吉島茂・大橋理枝ほか訳・編，朝日出版社.
- 朴珍希 (2016) 「日本における韓国語教育に関する研究—大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題—」 『岡山県立大学教育研究紀要』 1(1), 21-31.
- 朴珍希 (2017) 「外国語としての韓国語教育の現状と課題—岡山県内の大学・高校の「第2次韓流ブーム」以降の変化を中心に—」 『岡山県立大学教育研究紀要』 2(1), 13-23.
- 朴瑞庚・林河運 (2017) 「第2外国語としての韓国語学習に関する意識調査—島根大学の事例分析—」 『島根大学外国語教育センタージャーナル』 12, 111-122.
- 朴瑞庚 (2022) 「第二外国語としての韓国語の学習に関する一考察—授業内外における学びの実態—」 『ことばとくらし』 34, 39-50.

- 文嬉眞・金美淑（2014）「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(1)—」『愛知学院大学教養部紀要』61(4), 69-84.
- 文嬉眞・金美淑（2015）「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(2)—」『愛知学院大学教養部紀要』62(3), 19-43.
- 文部科学省（2004）「平成14年度大学における教育内容等の改革状況について」, https://warp.ndl.go.jp/web/20091022060528/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/03/04032301.htm（参照日：2026年3月19日）
- 文部科学省（2024）「令和4年度大学における教育内容等の改革状況について」, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00011.htm（参照日：2026年3月19日）